

順正寺報第十八号

ウラボン法要御案内

死は娑婆しやばの常とは知りながら、自身に直面さ

れた時、愛別離苦の悲しみ、更に「誰モ代ル者ナキ一人」の痛み、苦悩を体感なされ、一声の称名念佛へと御心向けの御事と拝し上げます。

さて、当山・順正寺では、下記の通り、送り盆の十六日夜、盂蘭盆（ウラボン）総経供養の一座をお勤め申し上げます。

叫喚きょうかん・焦熱しやうねつにも似た日暮らしのさなか、浄土の清風に触れ、ひとときを御先祖の徳と仏恩の深きことに思いをいたされる様念じつつ御案内申し上げます。

住職

記

日時・七月十六日（土）

午後七時ヨリ

会処・順正寺本堂

※法話一席

総経供養一座

以上

『周利槃陀伽という人』

京都 即成寺

釈 江口 貫貞松

昔、インドでお生まれになった仏教の開祖、お釈迦様には多くの優れたお弟子さんがいました。神通第一といわれた目連尊者、智慧第一といわれた舍利弗尊者、説法第一といわれた富憐那尊者等々……。

目連尊者は未来を予言したり、他人の心を読んだりする神通力（＝神に通じる力、超能力）に長けていた人であり、舍利弗尊者は大哲学者で、当時、最も尊ばれていたヴェーダ聖典（＝真理の書）に通じていて、あらゆる事象の本質を見究め、物事をよく知り、理論に長けた智慧者でありました。富憐那尊者は弁舌さわやかで表現力に富み、お話をするのがうまくて、よく人々の心に染み透る説法をするので有名でした。こうした資質に優れ清らかな聖行を修めて、人々に敬われ、正しい生き方、道を示す立派な方々がたくさんいました。そういうった中で一風変わったお弟子さんがいました。

“周利槃陀伽”という人です。

僕は挫けそうになった時、とても自分が無力で嫌だなと思った時、自分自身が悲しくなった時、この人のことを思い出します。そして、元氣づけられます。「よっしゃ、今一度。」「さあ、もういっちょう。」「負けんな。慌てるな。落ち着いて。」「僞るな。くさるな。ゆっくり、ゆっくりと。」「着実に。自分自身を磨け。」「周りに惑わされず黙々と。」……色々なかけ声が心の底から湧き起こってきます。僕は周利槃陀伽が好きです。彼は心の人であり、師であり、友であります。ほのぼのとした心の光に包まれて、静かな暖かみと清らかな風を運んでくれるこの人に、今日は憶いを馳せたいと思います。

周利槃陀伽という人は貧しい家に生まれました。彼にはお兄さんがいて、摩訶槃陀伽という名でした。大変優秀な方で、学問をよくし心優しく仁に篤く、その名声は近隣の村々にも聞こえた方でした。一方、弟の周利槃陀伽はと言いますと、これがまた、大変な愚か者で、人々から蔑まされ物笑いの種となり、いつも人から馬鹿にされて自分も

一緒になつてバツの悪そうに、「エへへ・・・。」と笑う有り様の人でした。物覚えが悪く、自分の名前すら満足に覚えられず言えなかつたといひます。兄に、細長い板に「しゅりはんだか」と字を彫ってもらい、両端に穴を開けてひもを通して輪っかにし、それを首から掛けていたそうです。見知らぬ人から話しかけられた時は慌てて緊張し、吃りながらその名札を見せて、一所懸命、自分ほうまく言葉のしゃべれない愚か者の周利槃陀伽です、ということを示そうとしました。

ある時、お釈迦様が沢山のお弟子さんを連れて、この槃陀伽兄弟の住んでいる村を訪れました。兄の摩訶槃陀伽はもう大喜びです。お釈迦様の説法を聞き、その清らかな姿に打たれてすぐに出家を願ひ出しました。そして、弟の周利槃陀伽も兄を慕い、お釈迦様の慈愛ある微笑みに引き付けられて、同じように出家を懇願しました。お釈迦様は静かに微笑まれ出家を許可されました。

兄の摩訶槃陀伽は熱心にお釈迦様のお話を聞き、禅定を修めて、ますます心豊かな智慧優れた僧侶へと成長していきました。ところが、周利槃陀伽

はと言いますと、どうにもこうにも全くダメでした。お釈迦様のお話中に居眠りはする、戒律を授けられてもすぐ忘れてしまつて守れない、集中力がなくて座禅を組んでジツと座っていることができない・・・。他のお弟子さんはどうとうサジを投げて、お釈迦様に彼を僧伽（出家修行者の集い）から外すようにという不満の声さえ上げ始めるようになりました。

兄の摩訶槃陀伽は不憫に思い、何とかして周利槃陀伽が修行について行けるようにと、自分の修行の時間を割いてまで彼につきっきりで面倒を見、先ず、彼に一番簡単な短い詩句を暗記させようとなりました。・・・けれどもやっぱりダメでした。数日たって、いつも昼間、放牧にきていた羊飼いの男が、隣で彼らのやりとりを何となく聞くとともに居眠りをしながら聞いていましたが、とうとうその羊飼いの男の方が鼻歌交じりにその詩句を暗記してしまつて、帰り間際に歌つて帰って行くのです。これを見て、摩訶槃陀伽は愕然としてしまいました。彼は悲しそうに弟を見つめ告げました。「もう、おまえは故郷の村に帰つて家の野

様は静かに微笑まれ、周利槃陀伽しりいはんだかのところをそつと離れていかれました。周利槃陀伽はそれに気付かず、熱心に、「塵を払え、垢を除け。塵を払え、垢を除け。」と、唱えながら箒ほうきで塵を払っていました。やがて、夕日が真っ赤に空を染め上げました。周利槃陀伽しりいはんだかは初めて手を止め顔を上げました。見ると、もうお釈迦様はそこにはいません。見渡してみると、その辺一带は、木屑や落ち葉、風に運ばれた塵などがきれいに掃き清められていて、とても清々すがすがしい気分になりました。周利槃陀伽しりいはんだかはちょっと嬉うれしくなつて、「ウフフッ。」と笑いました。

次の日の朝、飛びつきり早起きをしてまた、周利槃陀伽は掃除を始めました。「塵を払え……エーッと、塵を払え……ウーン、塵を払え……。アレツ？」なんと！周利槃陀伽しりいはんだかは昨日の詩句を忘れてしまっていました。「どうしよう。せっかくお釈迦様が私のために教えてくださった詩句なのに。ああ、どうしよう、どうしよう。」周利槃陀伽しりいはんだかはうろたえました。それでも、周利槃陀伽しりいはんだかの手は休まず、無意識のうちにサッサッと箒ほうきを動

かして掃除をしていました。「塵を払え……、塵を払え……、塵を払え……。ああ、やっぱり思い出せない。」周利槃陀伽しりいはんだかは困りました。でも、困りながらも掃除をつづけました。「ああ、どうしよう、どうしよう。」、唱えられないということ、そのことだけが彼の頭一杯に広がり、真っ白になりました。「ああ、ああーッ！」

すると、その時でした。石畳の地面に何か黒い小さい塊が染みのようにくっついて見つけた。周利槃陀伽しりいはんだかは一所懸命、箒で掃きます。が、全然とれませんでした。何かな？と、屈かかんでよく見ると、踏みつぶされて死んだ虫が塵やゴミなんかと一緒にくっついて日が経ち、こびりついているのでした。そこで木のへらを取ってきてガツガツと削り取り、その小さな塊を取り除いてやりました。「フーッ。なかなか日が経ってこびりついたゴミは取れないもんだなあ。放っておくとどんどん、どんどん重なってまるで我々の体にく垢かのようにネバネバとして、終しまいにはこびりついて取れなくなってしまふ。」「アッ！……。そうだ！垢を除け、だ。そうだ、そうだ。垢を除

けだった。思い出したぞ！確かに、垢を除けだした。やったー！」周利槃陀伽は、やっと、後の詩句を思い出すことができました。「よーし。唱えるぞ。垢を除け。垢を除け。垢を除け……。垢を除け……。アレッ？何だったかな。何かおかしいぞ。垢を除け……。垢を除け……。」「ああーッ！」なんと！今度は最初の詩句を忘れてしまいました。「クソーッ。何でおれはこうなんだ。」周利槃陀伽は何ともやるせないような気持ちになって木のへらを投げつけてしまいました。

目の前には箒が転がっていました。ぼんやりと眺めていた周利槃陀伽はやがて、黙ってその箒を取り上げまた掃除を始めました。「今の私にはこれしかないんだ。お釈迦様が私に与えてくださったこの行を捨ててはならない。」「垢を除け……。垢を除け……。垢を除け……。垢を除け……。垢を除け……。垢を除け……。垢を除け……。垢を除け……。」「周利槃陀伽は後の詩句だけを唱え、その日一日中掃除をしました。次の日も次の日も周利槃陀伽は掃除を続けました。」「垢を除け……。垢を除け……。垢を除け。

……。」「周利槃陀伽はただただ掃除をし続けました。雨が降ろうが風が吹こうが掃除を続けました。箒で掃くだけではなく、雑巾掛けをしたり、便所掃除をしたりもしました。周囲のお弟子さん達は、もう諦めて帰ったとばかり思っていた周利槃陀伽がいつの間にか戻ってきてきて寺院の掃除をしているので、胡散臭（うさんくさ）そうな目で眺めていましたが、お釈迦様の許しを得てやっているとこのことなので黙って見ていました。

ある日、周利槃陀伽は次のようなことを思いました。「我々の目というものは面白いものだ。ついつい目立ったものから始末しようとする。私はいつも塵やゴミが目立つ真ん中の方ばかりを掃除をしてきていた。でも一体全体どうだろうか。本当に掃除しなければならぬのは、あまり目の届かない壁ぎわや隅っこの方だ。塵やゴミが一杯たまっている。これではきれいに掃除をしているのか、塵やゴミを隅っこの方に寄せ集めているのか分らない。これからはよく気をつけ、目に見える所だけを綺麗にするのではなくて、目の届かない所見えにくい所をこそきれいに掃除するように

こころがけよう。」

「また、ある時は次のようなことを思いました。『掃いても掃いても二三日すれば、この前掃いたところに塵やゴミがまた降り積もっていく。きりが無いなあ。』」「ああ、そう言えばお釈迦様は、『塵を払え』と、おっしゃっていたなあ。そうだ、そうだ。『塵を払え、垢を除け』だったなあ。うん、そうだった。やっと思い出した。バカだなあ、今頃になって思い出して。ウフフッ。」「でも、掃いても掃いても降り積もってくる塵を何故払えとおっしゃるのだろう？無駄じゃないのかなあ？」

「フーッ。まあ、しょうがない。よしっ！塵を払え、垢を除け。塵を払え、垢を除け。塵を払え、垢を除け。……。」

また、ある時は次のようなことも思いました。「衣装箱や物入れの箱の中も開けてみるとほこりがたまっている。どうしてだろう？こんな所にたまるはずがないんじゃないのか？蓋をしていても塵やほこりは中にたまっていくのか。本当にどこにでも塵やほこりは降り積もるんだなあ。そして放っておくと垢みたいにくびりついてとれなくな

ってしまう。困ったもんだなあ。」

「塵を払え、垢を除け。塵を払え、垢を除け。塵を払え、垢を除け。……。」今日も、周利槃陀伽は朝から掃除をしています。もう、あれから何年何十年も経っていました。お釈迦様がやってきました。周利槃陀伽は合掌し礼拝しました。

「周利槃陀伽よ。もう、おまえは掃除をせずともよいだろう。今では誰もおまえのことを笑う者も軽蔑する者もない。見よ。おまえが掃除をしたところは清らかであり、よく調えられている。皆誰もがおまえの真摯な態度に心打たれ敬い、自然とおまえの姿を見て、周りの者は謙虚になり柔順となって各々自己の本分を尽くそうと考えるようになる。おまえの心はよく調えられ、寂靜の境地に住している。他の弟子たちと共に僧伽の生活を送ってはどうか。」

「いいえ、世尊よ。私には多くの煩惱が有りま

す。嫉み、妬み、怒り、腹立ち、貪りの心、愛執、愛着、愛欲、……愚痴の心。止むことなくそれらは私の心に沸いてき、塵のごとく降り積もってきます。放っておけば垢のごとくなり、ネバネバ

と私の心にまとわりついて、重く暗くさせます。最後にはこびりついて固い殻ができ、そこから自分の力では出られなくなってしまいます。人はこれを自分の本質だと思い、勝手に『自分の性分であるからしょうがない』と決めつけて、僞慢きょうまんになつたり、閉鎖的になつたり、懈怠けたいになつたりします。でも、これらは我々の本来的な姿ではありません。皆、煩惱に振り回され、支配されているに他なりません。しかし、世尊よ。どんなに心を傾けてこの心の垢を、塵を、除き、払おうとしても、決してすべてがなくなる、ということはないのです。結果を予定して求め、行う行為はみな空虚であり、それが成らない時は悲痛であります。世尊よ。私はこのことを諦観たいくわんしました。今は、私の心の垢は良く取り除かれ、塵は良く掃き清められています。が、しかし、同時に、今も煩惱の塵が私に見えないところで降りつもり始めてます。これからも、怠おごることなくこの帚ほうきを持って掃除をしていきたいと思えます。」

お釈迦様はにっこり微笑まれました。

周利槃陀伽は嬉うれしそうにまた掃除を始めました。

『白色白光の会』御案内

七月の白色白光の会は、左記の通り執り行ないます。

◎日時・七月十一日(月) 午後一時ヨリ

◎会処・順正寺本堂

会では常時会員を募集しています。皆で語り合い、学び会っていく楽しい会です。詳しいことは当寺までお尋ねください。

石神井公園をひさしぶりに歩いた。釣りをしている子、写生をしている人、将棋をしているおじいさん、ベビーカーを押しながら散歩している夫婦……。どっかからバンジョーの音色が聞こえてきた。

池に立て看板がしてあった。「最近、ペットのワニを見かけた人がいます。危険ですから池に入らないで下さい」何か変だけど、のんびりとしていてとっても落ち着く公園だ。菖蒲の花が美しかった。(貫裕)

☉ 177 東京都練馬区石神井町三の十七の四
03 (3996) 2064

順正寺